刊行にあたって

岡田英樹（立命館大学国際平和ミュージアム副館長）

『ミュージアム紀要』第６号は、昨年６月に開かれた国際シンポジウム「アジアにおける平和博物館の交流と協力」での報告を特集としてまとめた。このシンポジウムは、日本学術会議平和問題研究連絡委員会と立命館大学が共催して開催したもので、中国「侵華日本軍大虐殺遭難同胞記念館」、ベトナム「戦争証跡博物館〈ホーチミン市〉」、韓国「平和博物館センター」と日本「立命館大学国際平和ミュージアム」からの報告がなされた。参加館は十分とはいえなかったが、それぞれの国が体験した戦争を自国民へ語り継ぐだけでなく、アジアという視点から検証して、展示のあるべき方向性を検討しようという意欲的なシンポジウムであった。

日本軍による南京での大量虐殺を、民族教育の一環として若い世代に教育していこうと国家的規模で取り組んでいる中国、戦争の終結からわずか30年しか経っていないにもかかわらず、若者のなかには戦争のことを十分理解していないものが増えてきていることに危機感をいだき、リニューアルに取り組もうとしているベトナム、「ベトナム戦争での加害の問題」への問いかけから出発し、平和博物館の建設をめざし、また「生活空間のいたるところに平和展示コーナーを」作り出そうと奮闘している韓国――それぞれの博物館が抱える課題は異なるが、平和なアジアを作り上げるという点では一致できる。とはいえ、それぞれの国の歴史――それももっとも過酷な戦争の歴史を、客観的に相互理解し合うことはきわめて難しいことだということを、実感させるシンポジウムであった。

わたしたちが今取り組んでいる展示内容のリニューアル――とりわけ「15年戦争」時期の展示には、「アジアにおける相互理解」が強く求められていることを肝に銘じるべきである。そのリニューアルも、いよいよ最後の正念場を迎えた。「植民地・占領地における加害の実相」、「裁かれなかった戦争犯罪」、「未解決の戦争責任」といった項目を拡充しながら、「現代の戦争」、「平和とは何か」、「平和創造への取り組み」といった新しい課題にも挑戦している。この『紀要』が届けられる頃には、新生なったミュージアムが誕生していることであろう。ぜひ一度足を運んでほしい。

「特集」以外に６本の論考が掲載されているが、多くは新しい顔ぶれであり、若手研究者も多い。特別展で協力を願った方や、リニューアル解説原稿でお手伝いをお願いした方にも登場していただいた。もっと研究者の輪が広がり、リニューアル展示とおなじくこの研究誌も、社会的注目を集めるように努力しなければならないと思う。